

はあらざるなり、されど古より、この一派もありしことは勿論なり、是世にいふ古隅田川なるべし、今はいさゝかの流なれど、此頃はよほど廣き川なりしと見えし、義經記にいふ所は、陸奥の方より下總の國を経て、この隅田川に來りしなれば、荒川の方のはおもひもおよばず、かくかきしならん、北國記行にも、利根入間の二川落あへる所に、かのふるき渡りも有といふ。

〔異本曾我物語五〕さる程に鎌倉殿賴朝○源は諸國の武士共を召具して、建久四年癸丑四月下旬、鎌倉を出給ひ。略中七ヶ日と申に、三原長倉の御狩も過ければ、上野國へ御越あり、大戸、岩永、三倉、室田、長野も狩くらし給ひつゝ、角田川をも打過、大渡に著せ給ひぬ、鎌倉殿遙に眺望まししくて、是やこれ在五中將の都鳥に事問給ひし名所ぞかしと打詠給ふ、折ふし梶原、

角田川わたる瀬ごとにこととはん昔の人もかくや有けん

### 〔太平記三十〕武藏野合戦事

閏二月二十日、文和元年、中略新田武藏守義宗旗ヨリ先ニ進デ、天下ノ爲ニハ朝敵也、我爲ニハ親ノ敵也、只今尊氏ガ頸ヲ取テ軍門ニ不曝何ノ時ヲカ可期トテ、自餘ノ敵共ノ、南北へ分レテ引ヲバ少モ目ニ懸ズ、只二引兩ノ大旗ノ引クニ付テ、何クマデモト追蒐給フ、引モ策ヲ舉グ、追モ逸足ヲ出セバ、小手差原ヨリ石濱マデ、坂東道已ニ四十六里ヲ、片時ガ間ニゾ追付タル、將軍尊氏○足利石濱○天正本作打渡リ給ヒケル時ハ、已ニ腹ヲ切ラントテ、鎧ノ上帶切テ投捨テ、高紐ヲ放サントシ給ヒケルヲ、近習ノ侍共二十餘騎、返合テ追蒐ル敵ノ河中マデ渡懸タルト、引組々々討死シケル、其間ニ將軍急ヲ遁レテ、向ノ岸ヘカケ上リ給フ、

〔南山巡狩錄八〕このたゝかひの事を、新井源君美うたがひて曰、今地理によるに、小手差原より石濱にいたるの間、左程の川とては見えず、陵谷變遷よのつねなれども、心得られず、尊氏久米川に二日陣せられ、官軍其日の朝、小手差原に打のぞむとあるうへは、合戦の場は、今の川越